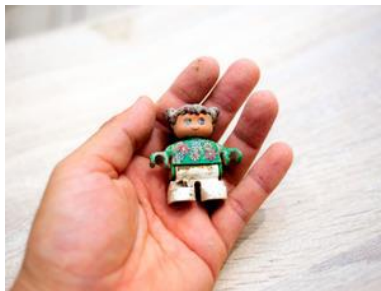


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4538 号 2018.8.10 発行

豪雨で泥ついたおもちゃ、再建に一役 寄付の返礼品に 朝日新聞 2018年8月10日



寄付者のもとへ返礼品として届けられるおもちゃ。白く乾燥した泥がついたままだ（ホハル提供）

西日本を襲った豪雨で被災した、障害のある子どもたちを預かる放課後等デイサービス「ホハル」（岡山県倉敷市真備くまび町）が、11日に営業を再開する。再建費用はインターネットで寄付を募るクラウドファンディング（CF）で集めた。「少しでも現場の雰囲気共有できれば」と、寄付者には水没して泥で汚れたおもちゃをお礼として送る。



施設は今年4月に開業。倉敷市真備町や、隣の矢掛（やかげ）町に住む小学1年生～高校生3年生10人が通っていた。発達障害や自閉症の子どもたちが、木材を使った秘密基地作りから、設計図通りにもものを作ることを学んだり、リズムをとりながら音読することで文字を学んだりしていた。



しかし今回の豪雨で天井の上まで水没。代表で児童指導員の滝沢達史さん（45）は「言葉がでなかった」と振り返る。ある程度水が引いた7月8日夕、施設に入ると、机やロッカー、教材はすべて泥水に浮いた状態で散乱していた。

子どもたちの半数が被災。環境の変化に敏感な子が多く、避難先でストレスを抱える子もいた。早期再開を決意したが、行政の支援を得るには時間がかかる。思いついたのがCFの利用。その際に、あえて乾燥した泥がついたミニカーやブロックなど捨てられずにいたおもちゃ約320個を、寄付した人への「お返し」にすることにした。

7月13日からCFの大手サイトを通じて呼びかけ。9日目には修繕や教材の購入に必要な400万円を上回った。「一日も早い再開を願っています」「子供たちの笑顔が戻りますように」。サイト上には応援の声が寄せられる。9日午前10時現在、504人から471万8千円が集まった。



施設は内装をやり直し、泥のかきだしや断熱材の入れ替え、消毒作業などを進めてきた。利用する子どもたちも壁のペンキ塗りや棚作りを手伝い、被災前の姿を取り戻しつつある。

11日にはセレモニーのほか、流しそうめん大会をする予定だ。利用者の子も以外も受け入れる。「全国からのご支援を頂き、すごく感謝しています」と滝沢さん。「明るいニュースを自分たちが届けることで、周りに勇気や希望を与えられたら」（金山隆之介）

## 書アートなど障害者作品展 浜松・天竜区、8月26日まで



静岡新聞 2018年8月10日  
山田さんの書アート作品が並ぶ作品展＝浜松市天竜区二俣町

浜松市天竜区二俣町の蔵を改装したギャラリー「マルカワの蔵又水（さすい）」で26日まで、地元の障害者らによる作品展「盛夏の輝き展」が開かれている。入場無料。

メインの蔵の展示室では、ダウン症の山田早織さん（31）の書アート作品20点を並べた個展「Sao 笑顔になる！」を開催。自由な感性で書いた「笑」の

字など力作が展示されている。

ほかにも浜北特別支援学校に通う児童生徒の貼り絵や工芸作品が出品され、来場者の目を楽しませている。

問い合わせはギャラリーを運営するNPO法人元氣里山＜電090（7303）5263＞へ。

## 私が「障がい者雇用」から教えてもらったこと 「障害」が「個性」に変わるとき

川田修

ダイヤモンド 2018年8月10日

川田修

1966年東京都墨田区生まれ。慶應義塾志木高等学校、慶應義塾大学法学部卒業。小学校5年から大学4年までサッカー漬けの生活を送り、1989年株式会社リクルート入社。入社から退職まで96カ月のうち、月間目標を95カ月達成。部署最優秀営業マン賞を数回、全社年間最優秀営業マン賞を受賞。1997年プルデンシャル生命保険株式会社入社、営業職の最高峰であるエグゼクティブ・ライフプランナーに昇格。その年の年間営業成績（2001年度の社長杯）でトップとなり、全国約2000人中の1位のPT（President's Trophy）を達成。現在は、エグゼクティブ・ライフプランナーとして活動するかたわら、「保険」だけでなく「本当の顧客満足とは」「紹介をしてもらえる営業」「お客様に感動を与える営業」などをテーマに企業からの講演・研修依頼を年に40回程度受けるなど、営業のプロフェッショナルとして多彩な活動を行う。保険営業や講演・研修を通して、これまで1000人以上の経営者と出会い、約800社の企業を訪問してきた。主な著書に『かばんはハンカチの上に置きなさい』『僕は明日もお客さまに会いに行く。』（以上、ダイヤモンド社）、『仕事は99%気配り』（朝日新聞出版）、『「営業の仕事」についてきれいごと抜きでお話しします』（三笠書房）、『一流の営業マンはなぜお客様から何度もゴルフに誘われるのか』（PHP研究所）などがある。プルデンシャル生命全国約2000人中1位のトップ営業直伝！1000人以上の経営者と会い、約800社の企業に触れてわかった、お客様の心を動かし「また行きたい」「紹介したい」を生む門外不出の秘密法則を紹介。

プルデンシャル生命 2000人中1位の成績をおさめ「伝説のトップ営業」と呼ばれる川田修氏が、あらゆる仕事に通ずる「リピート」と「紹介」を生む法則を解き明かし、発売たちまち重版が決まった話題の新刊『だから、また行きたくなる。』。

この記事では、本書の「あとがきにかえて」に記された、川田氏が取り組んだ障がい者雇用のエピソードを特別掲載する。（構成：今野良介）

### 「高次脳機能障害」の女性をアシスタントに迎えた

私のところで5年間、一緒に仕事をしてくれたアシスタントの安田靖子さんが、会社の朝会で、退職のあいさつとして、みんなの前で話してくれました。

「川田さんのアシスタントとして働き始めた5年前の年末に、毎月買っている雑誌の占いを見ていたら、『来年から数年は人の手助けに奔走することになります。それはその人のた

めですが、その経験が今まで知りえなかった素晴らしい世界にあなたを連れて行ってくれるでしょう』と書いてありました。その時は、川田さんと一緒に働くことを言っているのかなと思いましたが、今振り返ってみると、それは居村さんと仕事をする事だったのだと思います」

個人事業主である私のアシスタントとして、安田さんが一緒に仕事をするようになってまだ4ヵ月くらいしか経っていない頃に、「知的障がいの人を第二アシスタントとして雇用したい」と、私が突然言い出しました。

なぜそのようなことを思ったかを、ここでは詳しくは述べませんが、当時、私の人生に大きな影響を与える出会いがいくつかありました。

昔も今も変わらず尊敬している情熱家である株式会社アイエスエフネット代表の渡邊幸義さん、「日本一明るい視覚障がい者」と名刺に入れている NPO 法人 FDA の理事長の成澤俊輔さん、人を大切にする経営学会の発起人、元法政大学大学院教授の坂本光司先生。そんな人たちとの出会いから、私は、「障がい者雇用」という新たな挑戦をすることにしました。そして、前出の渡邊社長のご協力で、居村由貴さんという、高次脳機能障害という知的障がいの 23 歳の女性と一緒に働くことになりました。

後で教えてもらった話ですが、渡邊社長の周りの人たち全員が「高次脳機能障害の人はいくらなんでも無理ではないか」と反対されたそうです。しかし、渡邊社長が「不可能と思われることをするから意味がある」と言って、居村さんは、私と安田さんと一緒に働くことになりました。高次脳機能障害というのは、そのくらい重い障がいとして認識されているということを、私自身も後になって知りました。

ブルデンシャル生命を素晴らしいと思ったのは、今まで営業業務を行う支社という場で知的障がいの人が働いた前例がなかったのですが、そのためだけの雇用契約書を作成してくれたり、職場となるオフィスの建物や駅からの道を細かく確認し、大きな段差がないかなどをチェックしてくれたことです。

また、実際に働く数日前、居村さんに、支社のみんなの前で自己紹介とあいさつをしてもらいました。障がいの影響もあり、5分くらいかけてほんの数行の自己紹介とあいさつをしてもらったときに、半分近い人が涙しながら聞いているのを見たときには「やっぱり、この会社なら障がい者雇用ができる」と思いました。

そうやって居村さんが一緒に働くことになったのですが、働くと言っても言い出しっぺの私自身はほとんど外に出ていて、実際に居村さんに仕事を教えたり管理するのは第一アシスタントの安田さんでした。今でも忘れませんが、初日にパソコンに名刺の情報を入力する方法を教えたのですが、次の日にはパソコンの電源の入れ方も忘れてしまいました。1週間かけても、1日1枚の名刺情報を入力できるようになるのがやっとでした。

当然その間、安田さんの業務は進みません。安田さんは、居村さんが帰った 16 時以降にはじめて、集中してアシスタント業務を行う日々でした。安田さん自身もまだ仕事に慣れ始めてきている程度だったにもかかわらず、私のわがままに付き合ってしまったことで、帰りも遅くなり大変な日々を送っていました。私はというと、外から電話して「居村さんどう?」「少しずつでいいからね」というくらいで、その場の大変さに、まったく直接的には関与していませんでした。

当時の居村さんは、ミスをするるととても落ち込み、泣いてしまったり、お腹や頭が痛くなったりしてしまうので、その頃は月に一度支援員の人に来てもらい、「どのように接したらいいのか」「どのように仕事の指示をしたら伝わるのか」などを相談したり、居村さんにストレスが溜まっていないかなどのチェックをしてもらいながら、仕事を進めていました。それから5年が経ち、現在、居村さんは名刺 60 枚くらいの情報を入力し、はがきの印刷から発送までを自分一人でこなせるようになりました。またさまざまな第一アシスタントをフォローする仕事をしてもらうようにもなり、いなくては困る戦力として働いてくれています。

「障害」が「個性」になるとき

居村さんを雇用するまで、私は、知的障がい者というのは、仕事を教えてもいつまでたっても覚えられないものだと思っていましたが、それは違いました。ずっとできないのではなく、できるようになるのに時間がかかるのです。

たとえば、簡単なルールに沿った作業があるとします。一般的な資本主義の社会では、次の日にそれができなければイエローカードが出され、1週間後にできなければレッドカードが出されて退場となってしまいます。

しかし、周りが歩調を合わせてあげると、みんなで歩くことができるのだということを、居村さんと仕事をする中で教えてもらいました。周りが歩く速度を合わせることをまったくしなければ、人はそれを「障害」と呼ぶことになり、周りが歩調を合わせてあげられれば、それは「個性」と呼ばれるものになるのだと考えるようになりました。

そんな、たくさんのことを私たちに教えてくれた居村さんが、安田さんの最後の出勤日に、驚きと感激の「レベル 11」をしてくれました。

(※「レベル 11」とは、『だから、また行きたくなる。』の中で紹介している、お客さまが「普通だな」と感じるサービスレベルを、ほんの少しだけ超えて、お客さまの心を動かすサービスのことです)

この写真は、そのときのものなのですが、安田さんは号泣したあとの顔なんです。



(左) 居村さんと (右) 安田さん

その日、居村さんが帰る 16 時になって、用意しておいた花束を安田さんに渡したときに、こんなサプライズがありました。

「安田さん、長い間本当にありがとうございました」

少しもじもじしながら、居村さんがこんなことを言い出したのです。

「実は今日の私の服は、5 年前に初めて出勤して、安田さんと仕事をさせてもらった日の服なんです

.....。安田さんがいなかったら今の私はいないと思います。感謝の気持ちを込めて同じ服を着てきました。いままで本当にありがとうございました」

それを聞いた安田さんは驚き、感激して、そして何よりも喜んで、号泣してしまいました。後日、安田さんと居村さんと私の 3 人で送別会をしたときに、安田さんがこんなことを言っていました。

「坂本先生（前出）が以前おっしゃっていた『死ぬまで健常者でいられるなんて考えは傲慢なんですよ』という言葉がずっと胸にあって。居村さんと仕事をしたことで、仕事ができることの素晴らしさを、いかに自分が恵まれているのかを感じることができるようになりました」

安田さんはこれから、今までの経験を活かして、障がい者の支援員のような仕事をしていきたいと思っていて、そのための勉強もしていきたいと考えているそうです。

5 年前、占いに書いてあった「素晴らしい世界」に行くのかもしれない。

### 『だから、また行きたくなる。』著者からのメッセージ

売れている商品と、そうでない商品。

もう一度行きたいと思うお店と、そうでないお店。

伸びている会社と、そうでない会社。

結果を出し続ける人と、そうでない人。

あなたは、この違いは「何」だと思いますか？

値段も質も大きくは変わらないのに、なぜ、お客さまは 1 つの商品を選ぶのでしょうか。

実は、答えはとてもシンプルです。

「心を動かされる」から、です。

そこに秘密があるのです。

私は、川田修と申します。プルデンシャル生命保険という外資系企業で、営業の仕事をし

ています。全国約 2000 人中 1 位のトップセールスとして表彰されたことがあり、**10 万人に読んでいただいた『かばんはハンカチの上に置きなさい—トップ営業がやっている小さなルール』**をはじめ、何冊かの本を出版し、海外でも翻訳されました。

同じ会社の営業ならば、基本的に、同じ商品を、同じ環境、同じ価格で売っています。それでも、成績に大きな差が生まれます。これは、いったいなぜなのでしょう。

私がある理由に気づいたのは、前職のリクルートという会社から、現在のプルデンシャル生命に転職して、しばらくしてからでした。同じ営業の仕事だと思っていたものに、いくつかの「違い」があったのです。

一番大きな違いは、仕事の「ゴール」でした。

リクルート時代のゴールは、「**ご契約**」をいただくことだったように思います。しかし、プルデンシャル生命の仕事のゴールは「**ご紹介**」をいただくことです。ご加入いただいたお客さまに、保険の話ができる方をご紹介いただいて、またその人にご紹介していただき、お客さまの輪を広げていく。そんな仕事です。

現在、私はご紹介だけで、**約 2600 人**のお客さまを担当させていただき至っています。

「契約」であれば、「損得」でたどり着けることもあります。「こっちのほうが安いから」「今、買わないと損だから」などといった理由で。でも「紹介」となると、そうはいきません。「損得」で商品は買ってはくれても、人を紹介するとなると、「ほかの要素」が必要となってきます。

では、何が必要なのでしょうか。

それが「**お客さまの心を動かすこと**」なのです。

小さくてもいいから、お客さまに「感動」を提供することです。

なぜなら、**人は、心を動かされたときに、それを別の誰かに伝えたいくなるものだから**です。

私はいま、営業活動のかたわら、「本当の顧客満足とは」「紹介をしてもらえる営業」「お客様に感動を与える営業」などをテーマに、たくさんの企業から講演のご依頼をいただくようになり、全国各地の会社で、**毎年 40 回ほどの講演**を行っています。すると、不思議なことが起こります。

**「まさに社員に伝えたかったことを話していただきました。ありがとうございました」**

講演が終わると、ほとんどの経営者の方から、そう言って感謝されます。

また、現場の方々からは、こんなお手紙をいただくのです。

**「社長がいつも言っていることの意味が、やっとわかりました！」**

レストラン、ショップ、ホテルなどのサービス業、自動車、薬品、お菓子のメーカー。建設会社や不動産会社、さらには銀行、弁護士、税理士まで—。講演する業種も規模もまったく異なりますが、どの会社に行っても、私は同じ話をしています。最初は、同じようなお礼や感想の言葉をいただくことが不思議でしたが、その理由がわかってきました。

実は、**どんな会社や職種でも「大切なこと」は同じ**なのです。

私はこれまで **1000 人以上の経営者と出会い、800 社**くらいの企業を見てきました。伸びている会社、繁盛しているお店、売れている商品には、すべて共通点がありました。そして、それは私が営業現場で大切にしていることと一緒だったのです。

『**だから、また行きたくなる。**』では、私が感銘を受けた **50 以上の事例**を写真入りで紹介しながら、どんなお店や会社にも共通する、「**リピート**」や「**紹介**」を生み出す **2 つの法則**をお伝えします。

ひとつは、「**レベル 10**」「**レベル 11**」という考え方。

もうひとつは「**先味・中味・後味**」という考え方です。

どんな仕事であっても、この **2 つの掛け合わせ**を実践することで、**お客さまに選ばれる存在**になることができるのです。

**働きたい障害者を支援 鎌倉市が「二千人雇用センター」開設**



東京新聞 2018年8月10日

鎌倉市は、市福祉センター（御成町）一階に障害のある人の就労や職場定着を支援する「障害者二千人雇用センター」を開設した。利用は市民が対象で「ぜひ社会参加や自立に役立てて」と呼び掛けている。

センターでは、働きたい障害者の相談を受けたり、仕事を続けるための生活支援をしたりする。こうした機能を備えた障害者就業・生活支援センターは県内に八カ所あった。

ただ、鎌倉市民を対象とするセンターは横須賀市内にあり、立地面などから利用は少なかった。

**面談室も備えた障害者二千人雇用センター＝鎌倉市で**

このため、市は独自で開設することにした。名称の「二千人」は、市が掲げる障害者就労の目標人数で、現在は約千二百人と推計している。

利用希望者はまず、電話で相談し、必要に応じて面談日を設ける。市内の事業者の相談にも応じ、障害者雇用を増やす働き掛けなどにも取り組む。相談はいずれも無料。

センター長の高野宏章さんは「センターのことを知ってもらい、企業で働きたいと思っている人に活用してもらえたら」と話す。

問い合わせは、同センター＝電0467（53）9203＝へ。（北爪三記）



### 精神障害者の強制入院 議論が活発化 医療の防犯利用、懸念

東京新聞 2018年8月10日

「相模原事件はなぜ起きたのか」を出版した井原教授

多くの刑事事件に鑑定医として関わった独協医科大学埼玉医療センター（越谷市）の井原裕教授（精神医学）が、著書「相模原事件はなぜ起きたのか」（批評社）を出版した。相模原市の障害者施設殺傷事件を機に、精神障害者を強制的に入院させる措置入院を巡る議論が活発化した。井原教授は精神医療が犯罪防止に利用されることを懸念。司法による歯止めが必要と訴えている。

殺人罪などで起訴された植松聖被告（28）は事件前、障害者殺害を示唆する言動を繰り返して措置入院させられ、医師の判断で、十日ほどで退院していた。井原教授は「なぜこんな危険な人物を野放しにしたのかとの批判が集まり、精神障害者がスケープゴートにされた。措置入院は治療のための制度で、医師に治安維持

の責任を負わせるのはおかしい」と話す。

事件後、厚生労働省の検討チームは「退院後の支援が不十分だった」として、自治体が全患者の支援計画をまとめるよう提言。精神保健福祉法の改正も目指したが、障害者団体は「監視強化につながる」などと反発、昨年廃案となった。

井原教授は「措置入院には、医師と自治体の判断だけで患者を拘束できる危険な側面がある」と強調。「強化の方向に動けば、『逮捕状なき逮捕』がまかり通ることになり、大多数の善良な患者に不安を与えることになる」と指摘する。

著書では、統合失調症患者が書いた支離滅裂な文章を例に、精神疾患と、ヘイト（憎悪）の思想を含む思い込みとの違いについても説明。「プロの医師でも判断を誤ることはある」として、措置入院の決定や解除に裁判所が介入し、現在は定めのない入院期間についても期限を設けるべきだと提案する。

偏った考えに基づいた凶行をどう防ぐのか。「事件は刑事政策と精神保健福祉法のはざま

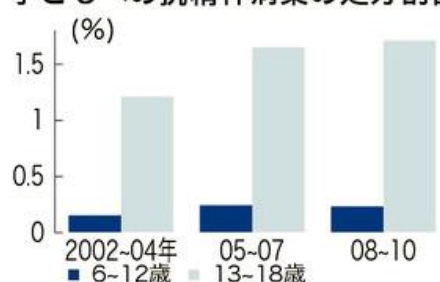
に引き継ぐ仕組みがないことも問題。司法もブレーキ役として関与し、三者の連携を密にしていくなか

＜相模原障害者施設殺傷事件＞ 2016年7月26日未明、津久井やまゆり園で入所者の男女19人が刃物で刺されて死亡、職員2人を含む26人が重軽傷を負った。元職員植松聖被告（28）が17年2月、殺人罪などで起訴された。横浜地検は5カ月間の鑑定留置で、完全責任能力が問えると判断。被告は16年2月、障害者殺害を示唆する言動を繰り返して措置入院となり、翌3月に退院したが、相模原市などは退院後の住所を把握せず、対応が不十分との指摘も出た。被告は逮捕後も障害者を差別する主張を続けている。現在、弁護側の請求による精神鑑定中。

### 抗精神病薬で無月経や糖尿病リスク 大半の子が検査せず 松本千聖

朝日新聞 2018年8月10日

#### 子どもへの抗精神病薬の処方割合



医療経済研究機構が18歳以下の外来患者を対象に分析した結果をもとに作製。精神神経学雑誌116巻11号に掲載

抗精神病薬を服用する前後に、糖尿病や無月経など副作用の検査を受けている子どもの患者の割合が極めて低いことが、医療経済研究機構などの調査で明らかになった。調査チームは、検査の必要性が十分に認知されていないことが理由だとしている。

抗精神病薬は、双極性障害（躁鬱（そううつ）病）や統合失調症の治療に使われ、子どもへの処方

増加傾向にある。血糖値や妊娠の維持に関わるホルモン（プロラクチン）値が上昇する副作用があるほか、糖尿病リスクが3倍に高まったり、短期間の服用でも無月経や乳腺の肥大が起きたりすることがある。米国などでは処方された子どもへの定期検査が推奨されているが、日本ではどれほど検査されているかわかっていなかった。

調査は、診療報酬明細書をもとにした厚生労働省のデータベースを使い、2014～15年に抗精神病薬を新たに処方された18歳以下の約4万4千人を対象とした。処方前1カ月から処方後1年3カ月を調査期間とし、その間に採血による検査を受けたかどうかを調べた。

### 福岡) 施設に疑問「でも移れなかった」 障害者の母親 奥村智司

朝日新聞 2018年8月10日

時優会が運営する障害者福祉の複合施設「時の丘学園」＝北九州市小倉南区舞ヶ丘2丁目



北九州市の社会福祉法人「時優会」の障害福祉施設が、給付費の不正受給などで事業の指定取り消し処分を受けることになった。利用者の家族を取材すると、他の事業所に移ることが難しく、施設側に疑問を感じながらも訴えにくい状況が浮かび上がってきた。

市は6日にグループホームや障害児のデイサービスなど9事業所の指定を取り消す処分を決定。不正受給額は約1億6千万円に上る。別の法人が運営を引き継ぐ10月までは時

優会が運営を続ける。現在、約80人が利用している。

市は指定取り消しの方針を2月に利用者の家族に説明した。十数年、重いダウン症の長男を預けていた50代の母親は「そんな施設を利用していたのか」とがくぜんとした。

## 西日本豪雨の被災地で「かき氷」ボランティア

神戸新聞 2018年8月10日

現地の災害ボランティアにかき氷を振る舞う舞う東良陽翔君(右)＝岡山県倉敷市真備町地区(三田市社協提供)

「かき氷ボランティア」として活動した三田青年フロンティアグループのメンバー＝三田市川除



かき氷でボランティア活動の疲れを癒やして。兵庫県三田市のボランティア団体「三田青年フロンティアグループ」が8日、西日本豪雨により大きな被害を受けた岡山県倉敷市真備町地区で、泥のかき出しなどを手伝う人たちにかき氷を振る舞った。猛暑の中の一風変わったボランティアに、復興を願って作業する人々から感謝の言葉が寄せられた。

同グループのメンバー4人と三田市社会福祉協議会の職員1人が8日、倉敷市災害ボランティアセンターの活動拠点を訪れた。午後1時ごろから3時間ほどで約450杯を手渡した。

メンバーの一人で藍小学校5年の男児(10)＝下相野＝は「多くの人に『ありがとう』と感謝してもらえた」。母(48)は「現場は想像以上に暑く、みんな汗だくだった。疲れている中でも『おいしかったよ』と声を掛けてくれたのが印象的だった」と振り返った。

市社協によると、7月に現地に入った職員から、猛暑の中で作業をするボランティア向けのサービスが喜ばれているとの情報が入った。同グループに打診したところ、すぐに“出店”が決まったという。

同グループは40年以上にわたって毎年、市内で七夕とクリスマスに合わせてイベントを開き、障害者を招待している。現在の会員は約20人。毎年8月の三田まつりでは、活動資金を得るためにかき氷の屋台を出し、装備や経験は万全だ。

妻(60)と参加した男性(59)＝神戸市北区＝は「ボランティアの人数が想像より少なく、復興への歩みは一步ずつという印象だった。猛暑がさらに続き、要請があればまたかき氷を届けたい」と話している。(高見雄樹)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行